資治通鑑 第 142 巻

令和 3 年 11 月 5 日

【齊紀八】　屠維單閼，一年。

■南齊、●北魏　（国会図書館デジタルコレクション・続国訳漢文大成. 経子史部 第 8 巻 8-242p）

東昏侯上永元元年（己卯，４９９年）

(東昏侯の諱は寶卷、字は智藏、明帝第二子、蕭衍らに廃される)

■春，正月，戊寅（１日）朔，大赦し，改元す。

■［陳顯達・崔慧景の雍州反撃］太尉の**陳顯達**は平北將軍の**崔慧景**等の軍四萬を督して魏を擊ち，雍州の諸郡を復さんと欲す。癸未（６日），魏は前將軍の**元英**（拓跋英、既に元の改姓）を遣わして之を拒がしむ。

●乙酉（８日），**魏主**は鄴を發す。（車駕初めて鄴を出る）

■辛卯（１４日），**帝**は南郊に祀る。

●戊戌（２１日），**魏主**は洛陽に至り，**李沖**（前年死去）の家を過ぎる。時に疾に臥し，之を望んで而して泣く。留守の官を見て，語りて**沖**に及び，輒ち流涕す。

●［旧風俗の改変］**魏主**は任城王の**澄**に謂って曰く、**(8-243p)**

「**朕**は京を離れて以來，舊俗は少しく變わるや不(いな)や？」

對えて曰く、

「聖化は日々に新たなり。」

帝は曰く、

「**朕**は入城し，車上の婦人の猶ほ帽を戴(いただ)き、小襖(しょうおう)を著るを見る，何の日々に新たなりと謂うや！」

對えて曰く、

「著る者は少なく，著ざるは者多し。」

帝は曰く、

「**任城**，此れは何を言う也！必ず滿城をして盡く著け使めんと欲す邪！」

澄と留守の官は皆な冠を免(ぬ)いで謝る。

●甲辰（２７日），魏は大赦す。**魏主**之の鄴に幸する也，**李彪**は迎えて鄴の南（既に罪を得て洛陽に居らず）に拜して，且つ謝罪す。**帝**は曰く、

「**朕**は卿を用いんと欲すれども，**李**僕射の思い而して止む。」

慰めて而して之を遣る。會々御史台の令史の**龍文觀**は告げる、

「太子の**恂**は之を收め被(ら)るの日，手ずから自らの理（弁明）を書く有り，**彪**は以て聞(ぶん)せず（140 巻明帝建武三年にあり）。」

尚書は表して**彪**を收めて洛陽に赴く。**帝**は以為うに**彪**の必ず然らずとす。牛車を以て散載（繫縛せず積載）して洛陽に詣り，赦に會い，免かるるを得る。

●魏の太保の齊郡の靈王の**簡**は卒す。

【馮氏の没落】

●二月，辛亥（５日），魏は咸陽王の**禧**を以て太尉と為す。

●［馮皇后の姦通と陰謀］**魏主**は連年外に在り，**馮后**は宦官の**高菩薩**に於いて私す。**帝**の懸瓠に在りて病

篤きに及び，**后**は益々意を肆にして憚る所無く，中常侍の**雙蒙**等は之が心腹為り。

●［彭城公主の訴え］**彭城公主**は宋王の**劉昶**之婦と為り，寡り居る。**后**は其の母の弟の北平公の**馮夙**の為に婚を求め，**帝**は之を許す。**公主**は願わず，**后**は之を強いる。**公主**は密かに家僮と與に雨を冒して懸瓠に詣り，**帝**に訴え，且つ具に**后**の為す所を道う。**帝**は疑い而して之を秘す。**后**は之を聞き，始めて懼れる。陰に母の**常氏**と與に女巫をして厭禱（呪い）せ使め，曰く、

「**帝**の疾若し起たざれば，一旦は**文明太后**の如く**少主**を輔けて稱制を得る者は，當に賞報して貲られざるべし。」

●［馮皇后に通告］**帝**は洛に還り，**高菩薩**、**雙蒙**等を収えて，案問し，具に伏す。**帝**は含溫室に在り，夜に**后**を引いて入り，坐を東楹（柱）にして賜り，御榻（牛車の踏み台）を去ること二丈餘を去りて，**菩薩**等に命じて狀（皇后の淫泆の狀）を陳ぜしむ。既に而して彭城王の**勰**、北海王の**詳**を召して坐に入れて，曰く、

「昔は汝の嫂為り，今は是れ路人，但だ入りて避ける勿れ！」

又た曰く、

「此の嫗は吾の脅を手刃せんと欲す！吾は**文明太后**の家の女なるを以て，廢する能わず，但だ虛しく宮中に置き，心有れば庶くは能く自ら死せん。汝等は吾は猶ほ情有るを謂う勿かれ也。」

二王は出で，**后**に辭訣を賜る。**后**は再拜し，首を稽（頭を地につける）して涕泣す。入りて後宮に居る。諸嬪御は之を奉ずること猶ほ**后**に禮する如く，唯だ**太子**（儲君）に命じて復た朝謁せざらしめ而して已む。

●［馮氏はついに衰退］初め，**（8-244p）馮熙**は**文明太后**之兄を以て**恭宗**（景穆太子の廟號）の女の**博陵長公主**に尚す。**熙**には三女有り，二は皇后と為り，一は**左昭儀**と為り，是に由りて**馮氏**の貴寵は群臣に冠たり，賞賜は累して巨萬。**公主**は二子を生む。**誕**、**修**（續は脩）なり。**熙**は太保と為り，**誕**は司徒と為り，**修**は侍中、尚書と為り，庶子の**聿**は黃門郎と為る。黃門侍郎の**崔光**は**聿**と同じく直し，**聿**に謂って曰く、

「君の家は富貴は太だ盛んにして，終に必ず衰敗せん。」

聿は曰く、

「我が家は何の負く所ぞ，而るに君は諒（續は故）無くして我を詛うや！」

光は曰く、

「然らず。物は盛えれば必ず衰える，此れ天地之常理なり。若し古事を以て之を推せば，慎まざる可からず。」

後歲餘に而して**修**は敗れる。**修**は性は浮かれ競い，**誕**は屢々之を戒め，悛めず，乃ち**太后**及び**帝**に白し而して之を杖つ。**修**は是に由りて**誕**を恨み，藥を求め，**誕**の左右に之をして毒さ使む。事は覺われ，**帝**は之を誅さんと欲し，**誕**は自ら咎めを引いて，懇ろに其の生を乞う。**帝**も亦た其の父老いたるを以て，**修**に百餘を杖ち，黜けて平城の民と為す。**誕**、**熙**は繼ぎて卒す（太和十九年二月馮誕卒、四月馮熙卒す）に及び，**幽后**尋ぎて廢せられ，**聿**も亦た擯（退）棄せられ，**馮氏**は遂に衰える。

【再び南征に向かうも、高祖は病死】

●癸亥（１７日），魏は彭城王の**勰**を以て司徒と為す。

■［陳顯達と元英との戰い］**陳顯達**は魏の**元英**と戰い，屢々之を破る。馬圈城（河南省汝陽道鎭平県の西北、現・南陽市鎮平県）を攻めて四十日，城中は食盡き，死人の肉及び樹皮を啖らう。癸酉（２７日），魏人は圍みを突きて走り，斬獲は千計り。**顯達**は入城し，將士は競いて城中の絹を取り，遂に追を窮めず。**顯達**は又た軍主の**莊丘黑**を遣わして南鄉に進擊せしめ，之を拔く。

●**魏主**は任城王の**澄**に謂って曰く：
「**顯達**は侵擾し，**朕**は親ら行かざれば，以て之を制す無し。」
三月，庚辰（４日），**魏主**は洛陽を發し，**於**（続は于）**烈**に命じて居守せしめ，右衛將軍の**宋弁**を以て祠部尚書を兼ね，七兵（尚書七兵曹）の事を攝して以て之を佐けしむ。**弁**は吏治に精勤し，恩遇は**李沖**に亞ぐ。
●［**魏主の反撃**］癸未（７日），**魏主**は梁城（河南省河洛道臨汝県、現・平頂山市汝州市）に至る。**崔慧景**は魏の順陽（河南省汝陽道鄧県、現・南陽市鄧州市、新野の西北）を攻め，順陽太守の清河の**張烈**は固く守る。甲申（８日），**魏主**は振威將軍の**慕容平城**を遣わして騎五千を將して之を救わしむ。
●［**彭城王の勰の魏主看病**］**魏主**の疾有るより，彭城王の**勰**は常に中に居りて醫藥に侍し，晝夜左右を離れず，飲食は必ず先ず嘗めて而る後に進め，首は蓬れ面は垢し，衣は帶を解かず。**帝**は久しく疾多く忿り，近侍は指を失えば，動もすれば誅斬せんと欲す。**勰**は顔を承けて間を伺い，救を匡す所多し。
●［**勰は軍務も担うは重い**］丙戌（１０日），**勰**を以て使持節、都督中外諸軍事と為す。**勰**は辭して曰く、
「臣は疾に侍り暇無く，安んぞ軍を治める能うや！願はくは更に一王を請い，軍要（軍権）を總べ使めて，臣は醫藥に專心するを得ん。」
帝は曰く、
「疾に侍し、軍を治めるは，皆な汝に憑る。吾は病して此くの如し，深く濟らざらんを慮る。六軍を安んじ、社稷を保つ者は，汝を捨てて而して誰あるや！**（8-245p）**何ぞ方に更に人に請いて以て心寄（心を推して託する）に違う容けん乎！」
●［**魏主は襄陽に迫る**］丁酉（２１日），**魏主**は馬圈に至り，荊州刺史の廣陽王の**嘉**に命じて均口（均水が南流して沔水に入る口、湖北省襄陽道光化県、現・襄陽市老河口市光化街道）を斷ち，齊兵の歸路を邀えしむ。**嘉**は，**建**（楚王建は 125 巻宋の文帝元嘉二十七年）之子也。
■［**陳顯達の敗北**］**陳顯達**は兵を引いて水西（均水の西）に渡り，鷹子山に據りて築城す。人情は沮して恐れ，魏と戰い，屢々敗れる。魏の武衛將軍の**元嵩**は胄を免いで陳を陷し，將士は之に隨い，齊兵は大敗す。**嵩**は，**澄**之弟也。
■戊戌（２２日），夜，軍主の**崔恭祖**、**胡松**は烏布幔を以て**顯達**を盛り，數人にて之を擔い，間道して分磧山より均水口に出て南に走る。己亥（２３日），魏は**顯達**の軍資の億計りを收め，將士に班け賜い，奔るを追い、漢水に至り而して還る。左軍將軍の**張千**（続は干）は戰死し，士卒の死者は三萬餘人。
■［**馮道根の撤退作戦**］**顯達**之北伐するや，軍は汐均口（汐水均水は同一）に入る。廣平（河南省汝陽道鄧県の東南、現・南陽市鄧州市）の**馮道根**は**顯達**に說いて曰く、
「汐均水は迅急にして，進み易く退き難し。魏が若し隘を守れば，則ち首尾は俱に急ならん。悉く船を鄧城（湖北省襄陽道光化県の北、現・襄陽市老河口市光化街道）に棄て，陸道を步み進み，營を列ね相い次ぎ，鼓して行きて而して前むに如かず，之を破るは必ずなり矣。」
顯達は從わず。**道根**は私屬（私兵）を以て軍に從い，**顯達**の夜走るに及び，軍人は山路を知らず，**道根**は險要に及ぶ毎に，輒ち馬を停めて之を指示し（地元出身で地理に明るい），衆は賴りて以て全くす。詔して**道根**を以て汐均口の戍の副と為す。**顯達**は素より威名有り，是に至り大いに損す。御史中丞の**范岫**は**顯達**の官を免ずるべきを奏し，**顯達**は亦た自ら職を解かんと表す。皆な許さず，更に**顯達**を以て江州刺史と為す。**崔慧景**も亦た順陽を棄てて走り還る。
●庚子（２４日），**魏主**の疾は甚しく，北に還り，谷塘原に至り，司徒の**勰**に謂って曰く、
「後宮は久しく陰德（記に、天子は陽道を理め、后は陰德を治む。陰事・陰令を主る）に乖けり，吾死する之後，自盡を

賜わる可く，葬むるに**后**の禮を以てすべし，庶(こいねが)はくは馮門之丑（続は醜）を免かれん。」
又た曰く：
「吾の病は益々惡く，殆んど必ず起たず。**顯達**を摧破すると雖も，而るに天下は未だ平らがず，嗣子は幼弱にして，社稷の倚(よ)る所，唯だ汝に在り。**霍子孟**（霍光。漢の武帝は昭帝を託す）、**諸葛孔明**は異姓を以て顧托を受く，況んや汝は親賢にして，之を勉めざる可けんや！」
勰は泣いて曰く、
「布衣之士は，猶ほ知己の為に命を畢わると。況んや臣は靈を**先帝**に托し（兄弟は同気），**陛下**之末光に依るを乎！但だ臣は至親を以て，久しく機要に參し，靈を寵して輝り赫き，海內は及ぶ莫し。敢えて受けて而して辭せざりし所以は，正に**陛下**の日月之明，臣の忘退之過を恕するを恃む耳。今復た任ずるに元宰を以てし，機政を總握す。主之震うの聲あり，罪を取るは必ずや矣。昔**周公**は大聖，**成王**は至明なり，猶ほ疑いを免れざるなり，而るに況んや臣を乎！此くの如くならば，則ち**陛下**が臣を愛すること，更に未だ始終之美を盡くさずと為す。」
帝は默然として之久しくして，曰く、
「詳(つまびら)かに汝の言を思うに，(8-246p)理實は奪い難し。」
乃ち手ずから詔して**太子**に曰く、
「汝の叔父の**勰**は，規を清くし懋（美）賞を懋め，白雲と俱に潔（続は清）し。榮を厭(いと)い紱(ふつ)を捨て，松竹を以て心と為す。吾は少(わか)きより與に綢繆(ろうびょう)（纏わり付く）し，未だ睽離(けいり)（別れ別れになる）に忍びず。百年之後，其れ**勰**が蟬を辭し冕(べん)（冠）を捨てるを聽(ゆる)し，其の沖挹(ちゅうゆう)（度量が広くて高ぶらない、遜り譲る）之性を遂げしめよ。」
侍中、護軍將軍の北海王の**詳**を以て司空と為し，鎮南將軍の**王肅**を尚書令と為し，鎮南大將軍の廣陽の**王嘉**を左僕射と為し，尚書の**宋弁**を吏部尚書と為し，侍中、太尉の**禧**、尚書右僕射の**澄**等と與に六人に政を輔けしむ。
●<u>［魏の高祖は谷塘原に殂す、善政を行う］</u>夏，四月，丙午（１日）朔，谷塘原に殂す。**高祖**（年 33）は諸弟を友愛し，始終間無し。嘗て從容として咸陽王の**禧**等に謂って曰く、
「我が後の子孫は解逅して不肖なれば，汝等は觀望し，輔(たす)ける可きときは則ち之を輔け，輔く可からざるときは則ち之を取り，它人の有と為す勿れ也。」
賢能を親任し，善に從うこと流れるが如く，庶務に精勤し，朝夕倦まず。常に曰く、
「人主は心を處すること公平に，誠を物に推す能わざるを患う。是の二者を能くすれば，則ち胡、越之人も皆な兄弟の如くなら使む可き矣。」
法を用いるに，大臣に於いて嚴にして容貸する所無しと雖も，然も人は小過有るは，常に多く略を闊す。嘗て食中に於いて蟲を得，又た左右は羹(あつもの)を進めて誤って**帝**の手を傷つける，皆な笑いて而して之を赦す。天地の五郊（気を五郊に迎える）、宗廟の二分（春分・秋分）之祭は，未だ嘗て其の禮を身親らとせざる無し。出でて巡遊し及び兵を用いる毎に，有司は道路を修めんと奏すれば，**帝**は輒ち曰く、
「粗ぼ橋樑を修め，車馬を通せば而して已む，草を去りて鏟(せん)（ならす）して平らかなら令むる勿かれ也。」
淮南に在りて兵の行くこと，境內に在るが如く，士卒に禁じて粟稻を踐傷するを得る無からしむ。或いは民樹を伐り以て軍用に供すれば，皆な絹を留めて之を償う。宮室は已むを得ざるに非ざれば修めず，衣は弊(やぶ)れれば，濯を浣し而して之を服し，鞍（続は縦に安革の字）勒は鐵木を用いて而して已む。幼きより力多く善く射，能く指を以て羊骨を彈碎し，禽獸を射て命中せざるは無し。年十五に及び，遂に復た畋獵せず。常に史官に謂って曰く、

「時事は以て直書せざる可からず。人君は威福は己に在り，能く之を制する者無し。若し史策して復た其の悪を書かざれば，將に何の畏忌する所かあらん邪！」

●［喪を發せず、太子即位］彭城王の**勰**は任城王の**澄**と謀り，**陳顯達**の去ること尚ほ未だ遠からずを以て，其の覆(かえ)りて相い掩逼するを恐れ（反撃を恐れる），乃ち秘して喪を發せず，徙して臥輿に御し，唯だ二王と左右數人とのみ之を知る。**勰**は出入するに神色異なる無く，膳を奉じ，薬を進め，外奏を可決するに，一に平日の如し。數日にして，宛城に至り，夜，臥輿を郡の聽事（中庭）に進め，棺斂を加えるを得，還(ま)た臥輿を載せて內，外に知る者有る莫し。中書舍人の**張儒**を遣わし詔を奉じて**太子**を征（続は徴）す。(8-247p)
密かに凶問を以て留守の**於烈**に告げる。**烈**は行留を處分し，舉止は變無し。**太子**は魯陽（河南省河洛道魯山県、現・平頂山市魯山県）に至り，梓宮(しきゅう)（天子の棺）に遇い，乃ち喪を發す。丁巳（１２日），即位し（帝の諱は恪、孝文帝の第二子），大赦す。
●［彭城王の勰への疑い］彭城王の**勰**は跪いて遺敕數紙を授ける。東宮の官屬の多くは**勰**の異志有るを疑い，密かに之を防がんとし，而るに**勰**は誠を（東宮の官に）推して（嗣君に仕えるに）禮を盡して，卒して間隙無し。咸陽王の**禧**は魯陽に至り，城外に留まって（異志有るを疑い）以て其の變を察す。之久しくして，乃ち入り，**勰**に謂って曰く、
「汝が此の行は唯だ勤勞するのみにあらず，亦た實に危險なり。」
勰は曰く、
「兄は年長じて識高く，故に夷險有るを知る。**彥和**（勰の字）は蛇を握り虎に騎(の)りて，艱難を覺えず。」
禧は曰く、
「汝は吾が後れて至るを恨む耳。」
●［遺言により馮皇后に死を強要］**勰**等は**高祖**の遺詔を以て，**馮后**に死を賜わる。北海王の**詳**は長秋卿（皇后宮の卿）の**白整**をして入りて**后**に薬を授け，**后**は走りて呼び，飲むを肯ぜず，曰く、
「官は豈に此く有らんや，是れ諸王輩の我を殺す耳！」
整は執りて持ち之に強（続は彊）い，乃ち薬を飲みて而して卒す。喪は洛城（続は洛陽）の南に至り，咸陽王の**禧**等は**后**が審(つまびら)かに死せるを知り，相い視て曰く、
「設(たと)い遺詔無くとも，我が兄弟は亦た當に策を決して之を去るべし。豈に失行の婦人をして天下を宰制し，我が輩を殺さ令む可けん也！」
謚して**幽皇后**と曰う。（謚の法に、壅遏、おさえとどめる、通ぜざるを幽という）
■五月，癸亥（４８日?），撫軍大將軍の始安王の**遙光**に開府儀同三司を加える。

●丙申（２１日），魏は**孝文帝**を長陵（瀍西にあり）に葬し，廟號は**高祖**とす。
●［彭城王の勰の任命］魏の**世宗**は彭城王の**勰**を以て相と為さんと欲す。**勰**は屢々遺旨を陳べ，素懷を遂げんを請い，**帝**は之に對えて悲慟す。**勰**は懇請して已まず，乃ち**勰**を以て使持節、侍中、都督冀、定等七州諸軍事、驃騎大將軍、開府儀同三司、定州刺史と為す。**勰**は猶ほ固辭し，**帝**は許さず，乃ち官に之く。
●［王肅を左遷して雍州刺史に出す］魏の任城王の**澄**は**王肅**が羈旅（元江南の人で魏に奔るの意味）にして，位は己の上を加えるを以て，意は頗る平らかならず。會々齊人の降者の**嚴叔懋**は
「**肅**は逃げて江南に還らんと謀る」
と告げ，**澄**は輒ち**肅**を禁止（宮省への入場禁止）して，表して謀叛と稱す。案驗するに實無し。咸陽王の**禧**等

は
「**澄**は**擅**に宰輔を禁ず」
と奏して，免官して第に還らしめ，尋ぎて出でて雍州刺史と為す。
●六月，戊辰（２４日），魏は皇妣の**高氏**（前巻にあり）を追尊して**文昭皇后**と為し，**高祖**に配饗し，舊塚（続は冢）を増修し，終寧陵（長陵の東南）と號す。**后**の父の**颺**に追賜して勃海公を爵し，謚して**敬**と曰い，其の嫡孫の**猛**を以て爵を襲わしむ。**后**の兄の**肇**を封じて平原公と為し，**肇**の弟の**顯**を澄城（陝西省關中道澄城県、現・渭南市澄城県）公と為す。**(8-248p)** 三人は同日に受封す。**魏主**は素より未だ諸舅を識らず，始めて衣幘（頭巾）を賜って引見し，皆な惶懼して措（措置）を失う。數日之間，富貴は赫奕（物事が盛んなこと）す。
●秋，八月，戊申（５日），魏は**高祖**の遺詔（高祖は内官を定め、左右昭儀は位を大司馬になぞらえ、三夫人は三公になぞらえる）を用い，三夫人以下は皆な遣りて家に還らしむ。

■［帝は親近と籠もりがち］**帝**は東宮に在りてより，學を好まず，唯だ戲を嬉しくすること度無し。性は重澀（渋、派手でない）にして言少なし。即位に及び，朝士と相い接せず，専ら宦官及び左右の御刀、應敕等を親信す。

【齊皇帝の奔放と朝廷内紛、蕭衍の陰謀】

■［六貴に対して、雍州刺史の蕭衍の独自画策］是の時，揚州刺史の始安王の**遙光**、尚書令の**徐孝嗣**、右僕射の**江祏**、右將軍の**蕭坦之**、侍中の**江祀**，衛尉の**劉暄**は内省（禁中にありて華林省、下省に分ける）に更直（交代して宿直）し，日を分けて敕を帖す（詔勅の清書）。雍州刺史の**蕭衍**は之を聞き，從舅の錄事參軍の范陽の**張弘策**（范陽方城の人、蕭衍の母張氏は弘策の従父弟）に謂って曰く、
「一國に三公（左傳に晉の士薦曰く、狐裘蒙茸たり。一國に三公あり、吾誰んか適従せん）あるすら猶ほ堪えず，況んや六貴が朝を同じくするをや，勢いは必ず相い圖り，亂は將に作らん矣。禍いを避け福を圖るは，此の州に如くは無し。但だ諸弟は都に在り，恐らくは世の患いに罹らん，當に更に益州（蕭衍の兄の懿）と之を圖るべき耳。」
乃ち密かに**弘策**と武備を修し，它人は皆な謀に預るを得ず。驍勇を招聚すること以て萬を數え，多く材竹を伐り，之を檀溪（湖北省襄陽道襄陽県の西南、今は枯れている）に沉め，茅を積んで岡阜の如く，皆な之を用いず。中兵參軍の東平の**呂僧珍**は其の意を覺り，亦た私かに櫓の數百張を具える。是より先，**僧珍**は羽林監と為り，**徐孝嗣**は引きて其の府に置かんと欲し，**僧珍**は**孝嗣**が久しく能わざるを知り，固く**衍**に從うことを求める。是の時，**衍**の兄の**懿**は益州刺史を罷めて還り，仍ほ郢州の事を行ない，**衍**は**弘策**をして**懿**を說いて曰わ使む、
「今六貴は肩を比べ，人々は自ら救を畫き，權を爭いて睚眥（睨み付けるし），理相は圖滅（相滅ぼすを謀る）せん。**主上**は東宮より素より令譽無く，左右と媟近（慣れ近づく）し，慓輕（剽軽軽率）忍虐，安んぞ肯て政を諸公に委ね，虛しく坐して諾を主らんや（朝政で諾という以外なくなる）！嫌忌（嫌々ならば）は久しく積めば（鬱屈して），必ず大いに誅戮を行わん。始安が**趙王倫**（84 巻晉恵帝永寧元年にあり）に為らんと欲するは，形跡は已に見わる。然れども性は猜（疑）に（度）量は狹く，徒らに禍階と為らん。**蕭坦之**は忌克にして人を陵（駕）し，**徐孝嗣**は（牛のように）人が鼻を穿つを聽し，**江祏**は斷無く，**劉暄**は闇弱なり。一朝禍が發すれば，中外は土崩す。吾が兄弟は幸いにも外籓を守り，宜しく身の計を為すべし。今猜防未だ生ぜざるに及び，當に悉く諸弟を召すべし，恐らくは異時（後日）に足を拔くに路無からん矣。**(8-249p)** 郢州（荊州湘州の下流に

あり赴き集る所）は荊、湘を控え帯し，雍州の士馬は精強にして，世が治まるときは則ち本朝に誠を竭し，世が亂れるときは則ち以て匡濟（匡正救助）するに足る。時に進退するは，此くは萬全之策也。若し早く圖らざれば，後悔は及ぶ無し。」

弘策は又た自ら**懿**を說いて曰く、

「卿の兄弟の英武は，天下に敵無きを以て，郢、雍二州に據れば，百姓の為に命を請い，昏きを廢して明るきを立て，掌を反すは易く，此くは**桓**、**文**之業也。豎子の欺く所と為り，笑いを身後に取る勿かれ。雍州は之を揣ること已に熟し，願はくは善く之を圖れ！」

懿は從わず。**衍**は乃ち其の弟の驃騎外兵參軍の**偉**及び西中郎外兵參軍の**愔**を迎えて襄陽に至らしむ。

■［江祏兄弟の実力］初め，**高宗**は群公に顧命（恩情のこもった命令）すると雖も，而して多く腹心を寄せるには**江祏**兄弟に在り。二**江**は殿內に更直し，動止は之に關す。**帝**は稍く意を行なわんと欲し，**徐孝嗣**は奪う能わず，**蕭坦之**は時に異同有り，而して**祏**は制を執りて堅確なり，**帝**は深く之を忿る。**帝**の左右の會稽の**茹法珍**、吳興の**梅蟲兒**等は，**帝**の委任する所と為り，**祏**は常に之を裁折し，**法珍**等は切齒す。**徐孝嗣**は**祏**に謂って曰く、

「**主上**は稍く異同有り，詎んぞ盡く相い乖反（異を立て指示に從わず）す可し！」

祏は曰く、

「但だ以て付（付託）せ見れよ，必ず憂うる所無し。」

■［帝廢立と江夏王の寶玄擁立など諸々の動き］**帝**の德を失うは侵く彰われ，**祏**は**帝**を廢し，江夏王の**寶玄**を立てんと議す。**劉暄**は嘗て**寶玄**の郢州の行事と為り，事を執るに過刻（過酷）なり。馬を獻ずる人有り，**寶玄**は之を觀んと欲し，**暄**は曰く、

「馬は何ぞ觀るを用いんや！」

妃は煮肫（豚肉の煮たもの）を索め，帳下は**暄**に咨り，**暄**は曰く、

「旦だ已に鵝（鵞鳥）を煮たり，復た此くを煩わさず。」

寶玄は恚りて曰く、

「舅は殊に渭陽の情無し。」（舅が情を甥に用いない）

暄は是に由りて**寶玄**を忌み，**祏**の議に同ぜず，更に建安王の**寶寅**を立てんと欲す。**祏**は密かに始安王の**遙光**に謀り，**遙光**は自ら年長を以て，意（続は欠如）は自ら取らんと欲し，微旨を以て**祏**を動かす。**祏**の弟の**祀**は亦た**少主**の保ち難きを以て，**祏**に**遙光**を立てるを勸める。**祏**の意は回り惑い，以て**蕭坦之**に問う。**坦之**は時に母の喪に居り，起復（喪中より立てる）して領軍將軍と為り，**祏**に謂って曰く、

「**明帝**立つは，已に次に非ず，天下は今に至るまで服さず。若し復た此を為せば，恐らくは四方（主は誤り）は瓦解せん，我は敢えて言わざるを期する耳。」

遂に宅に還りて喪を行う。（胡三省によれば、蕭坦之は栄盛にして、喪中にかこつけて、廢立の大事に関わらず）

祏、**祀**は密かに吏部郎の**謝朓**に謂って曰く、

「**江夏**は年少く，脫し負荷に堪えずとも，豈に復た廢立を行う可きや！**始安**は年長にして，入りて纂（大統を継ぐ）ぐとも物望（人望）に乖かざらん。此くを以て富貴を要めるに非らず，政に是れ國家を安んずるを求める耳。」(8-250p)

■［吏部郎の謝朓の誅殺］**遙光**は又た親しき所の丹陽丞の南陽の**劉渢**を遣わして、密かに**朓**に於いて意を緻（続は致、周密に致す）さしめ，引いて以て黨と為さんと欲し，**朓**は答えず。之の頃くして，**遙光**は**朓**を以て衛尉の事を兼知せしめ，**朓**は懼れ（遙光の推薦を恐れる），即ち**祏**の謀を以て太子の右衛率の**左興盛**に告げ，

輿盛は敢えて發せず。**朓**は又た**劉暄**を說いて曰く、
「**始安**は一旦南面せば，則ち**劉瀛**、**劉晏**は卿の今の地に居らん，但だ卿を以て反覆の人と為さん耳。」
晏なる者は，**遙光**の城局參軍也。**暄**は陽りて驚き，馳せて**遙光**及び**祏**に告げる。**遙光**は**朓**を出して東陽郡と為さんと欲す。**朓**は常に**祏**を輕んじ（朓は才能門閥を以て祏を軽んじる），**祏**は固く之を除かんを議す。**遙光**は乃ち**朓**を収えて廷尉に付け，**孝嗣**と、**祏**、**暄**等と連名して啟す、
「**朓**は內外を扇動し，妄りに乘輿（天子）を貶し，竊に宮禁を論じ，親賢を間謗（誹謗）し，朝宰を輕議す。」
朓は遂に獄中に死す。

■［祏兄弟の収監、劉暄は驚く］**暄**は以えらく**遙光**が若し立てば，己は元舅之尊を失わんと，肯て**祏**の議に同ぜず。故に**祏**は遲れて疑い久しく決せず。**遙光**は大いに怒り，左右の**黃曇慶**を遣わして**暄**を青溪橋に於いて刺さしめんとす。**曇慶**は**暄**の部伍の多きを見て，敢えて發せず。**暄**は之を覺り，遂ら**祏**の謀を發き，**帝**は命じて**祏**兄弟を收めしめる。時に**祀**は內殿に直し，異有るを疑いて，信（使者）を遣わして**祏**に報じて曰く、
「**劉暄**は異謀有るに似たり。今は何の計をか作さんや？」
祏は曰く、
「政に當に靜かに以て之を鎭むべし。」
俄に詔有りて**祏**を召して入見せしめ，中書省に停める。初め，**袁文曠**は**王敬則**（前卷にあり）を斬るの功を以て當に封ぜられるべきに，**祏**は執りて（誰が一番の功労者かの論争あり）與えず。**帝**は**文曠**をして**祏**を取ら使め（殺さしむ），**文曠**は刀環を以て其の心（心臟・胸）を築きて曰く、
「復た能く我が封を奪わんや不や！」
弟の**祀**を幷せて皆な死す。**劉暄**は**祏**等の死せるを聞き，眠中に大いに驚き，戶外に投出し，左右に問う、
「收めるに至るや未だや？」
良く久しくして，意は定まり，坐に還り，大いに悲しんで曰く、
「念わざりき江，行きて自ら痛まんとは也！」（禍が自らに及ぶを恐れる）

■［帝の奔放さが極まる、昼夜逆転の朝政、江祥誅殺］**帝**は是れより忌憚する所無く，益々自ら恣にするを得，日夜近習と後堂に於いて鼓叫戲馬（馬に乘り歩く）す。常に五更を以て就寢し，晡に至りて乃ち起きる。群臣は節、朔朝見（每月朔日の朝參に、別に一日の責任朝參あり）するに，晡後に方めて前み，或いは暗（続は闇）に際して遣り出る。台閣の案奏は，數十日閱て乃ち報じ，或いは在る所を知らず。宦者を以て魚肉を裹みて家に還るは，並びに是れ五省の黃案（尚書五省の文案は黃色札を用いる）なり。**帝**は常に騎を習い適を致す（心に叶う），顧みて左右に謂って曰く、
「**江祏**は常に吾の乘馬を禁ず。小子若し在れば，（8-251p）吾は豈に能く此くを得るや！」
因りて問う、
「**祏**の親戚の餘は誰や？」
對えて曰く、
「**江祥**は今冶（東治）に在り。」
帝は馬上にて敕を作り，**祥**に死を賜う。

【始安王の遙光の反乱】

■［始安王の遙光は発狂病気と称して籠もる］始安王の**遙光**は素より異志有り，其の弟の荊州刺史の**遙**

欣と密かに舉兵して東府に據り，**遙欣**をして江陵より兵を引いて急に下ら使めんと謀り，期を刻して將に發せんとす，而るに**遙欣**は病にて卒す。**江祏**の誅せ被れるや，**帝**は**遙光**を召して入殿せしめ，告げるに**祏**の罪を以てし，**遙光**は（禍が及ぶ事を）懼れ，（中書）省に還り，即ち陽(いつわ)りて狂（狂人のふり）して號哭し，遂に疾と稱して復た台に入らず。

■［ついに遙光の挙兵］是より先，**遙光**の弟の豫州刺史の**遙昌**は卒し，其の部曲は皆な**遙光**に歸す。**遙欣**の喪の還るに及び，東府の前（秦淮河）の渚に停まり，荊州の衆力、送る者甚だ盛んなり。**帝**は既に**二江**を誅し，**遙光**が自ら安んぜざらんことを慮って，遷して司徒と為し，第に還さ使めて，召し入れて旨を諭さんと欲す。**遙光**は見(まみ)えて殺されんことを恐れ，乙卯（１２日）の晡の時，二州（荊州・豫州）の部曲を東府の東門に收集し，**劉渢**、**劉晏**等を召して兵を舉げんと謀り，**劉暄**を討つを以て名（目）と為し、夜，數百人を遣わして東冶を破り，囚を出し，尚方（工房）に於いて仗を取る。

■［左衛將軍の沈約は朱衣にて台に入る］又た驍騎將軍の**垣歷生**を召す。**歷生**は信（使者）に隨いて而して至る。**蕭坦之**の宅は東府の城東に在り，**遙光**は人を遣わして之を掩取せしめ，**坦之**はを露袒（露髷で冠を被らず肉袒す）して牆を逾えて走りて台に向かう。道に游邏（巡邏）主の**顏端**に逢い，之を執り，**坦之**は**遙光**の反するを以て告げる，信ぜず。自ら往きて詷(けい)（一緒に）問し，實を知り，乃ち馬を以て**坦之**に與(あた)え，相い隨いて台に入る。**遙光**は又た尚書左僕射の**沈文季**を其の宅に於いて掩取し，以て都督と為さんと欲し，會々**文季**は已に台に入る。**垣歷生**は**遙光**に說きて城內の兵を帥いて夜台，輦を攻め城門を荻燒（荻を以て火を付ける）せんとし，曰く、

「公は但だ輿に乘りて後に隨い，掌(てのひら)を反(かえ)すがごとく克つ可し！」

遙光は狐疑(こぎ)して敢えて出ず。天は稍(ようや)く曉になり，**遙光**は戎服して聽事に出でて，命じて仗を上(たてまつ)りて城に登らしめ賞賜を行う。**歷生**は復た軍を出すを勸め，**遙光**は肯ぜず，台中に自ら變有らんことを冀(こいねが)う。日の出ずるに及び，台軍は稍(ようや)く至る。台中は始めて亂を聞き，衆情は惶惑す。曉に向かい，**徐孝嗣**を召すの詔有り，**孝嗣**は入り，人心は乃ち安んず。左衛將軍（続、左將軍）の**沈約**（宋書を編纂す）は變を聞き，馳せて西掖門に入る。或るひとは戎服するを勸め，**約**は曰く、

「台中は方に擾攘す，我の戎服を見れば，或る者は**遙光**と同ずると謂わん。」

乃ち朱衣して而して入る。

■［戒嚴し、両軍衝突］丙辰（１３日），詔して建康を曲赦（特赦）し，中外は戒嚴す。**徐孝嗣**以下は宮城に屯して衛り，**蕭坦之**は台軍を帥いて**遙光**を討つ。**孝嗣**は內に自ら疑い懼れ，**(8-252p) 沈文季**と與に戎服して共に南掖門の上に坐し，之と共に世事を論ぜんと欲し，**文季**は輒ち引くに他辭を以てし，終に及ぶを得ず。**蕭坦之**は湘宮寺（宋の明帝の興す寺院）に屯し，**左興盛**は東籬門（臺城の外城の六門に城郭無し）に屯し，鎮軍司馬の**曹虎**は青溪の大橋に屯す。衆軍は東城の三面を圍み，司徒府（宋の元嘉中に澎城王義康は司徒になり、東府の側に置く）を燒く。**遙光**は**垣歷生**を遣わして西門より出でて戰わしめ，台軍は屢々敗り，軍主の**桑天愛**を殺す。**遙光**之起兵する也，咨議參軍の**蕭暢**に問い，**暢**は正色して從わず。戊午（１５日），**暢**は撫軍長史の**沈昭略**と與に潛かに南門より出，台に詣りて自ら歸す，衆情（東府の衆の気持ち）は大きく沮(はば)む。**暢**は，**衍**之弟なり。**昭略**は，**文季**の之兄の子也。

■［遙光の反乱の鎮圧、荊州も鎮圧］己未（１６日），**垣歷生**は南門より出でて戰い，因りて槊（続は矟）を棄てて**曹虎**に降り，**虎**は命じて之を斬らしむ。**遙光**は大いに怒り，床上に於いて自ら踴（続は踊）り，**歷生**の子を殺さ使む。其の晚，台軍は火箭を以て東北の角樓を燒く。夜に至り，城は潰(つい)え，**遙光**は小齋の帳中に還り，衣帢（衣と帽）を著けて坐し，燭を秉(と)りて自ら照らし，人をして反りて拒ま令め，齋閣は皆な關

を重ね，左右は並んで屋を逾えて散り出る。台軍主の**劉國寶**等は先ず入り，**遙光**は外兵の至るを聞き，燭を滅して床下に扶匐す。軍人は排して閣に入り，暗中に於いて牽きずり出し，之を斬る。台軍は入城し，室屋を焚燒して且に盡きんとす。**劉渙**は走りて家に還り，人の殺す所と為る。荊州の將の**潘紹**は**遙光**の作亂を聞き，謀りて之に應ぜんと欲す（江陵を挙げて応じんとす）。西部郎司馬の**夏侯詳**（南康王寶融は西部郎として江陵に鎭し、その司馬）は**紹**を呼んで事を議し，因りて之を斬り，州府（荊州、西中郎府）は以て安ず。

■［始安を平らぐの論功行賞］己巳（２６日），**徐孝嗣**を以て司空と為す。**沈文季**に鎮軍將軍を加え，侍中、僕射は故の如し。**蕭坦之**は尚書右僕射、丹陽尹と為し，右將軍は故の如し。**劉暄**を領軍將軍と為す。**曹虎**を散騎常侍、右衛將軍と為す。皆な**始安**を平らぐ之功を賞す也。

●■［魏の南徐州刺史の沈陵は來降す、長史の盧淵の予防策］魏の南徐州（魏の高祖置く、宿豫に治す）刺史の**沈陵**は來降す。**陵**は，**文季**之族子也。（宋の沈文秀は東陽を守り、明帝泰始五年に魏に降り、文季は従う）時に魏の徐州刺史の京兆王の**愉**は年少くして，軍の府事は皆な兼長史の**盧淵**が決す。**淵**は**陵**の將に叛さんとするを知り，諸城に勅めて潛かに之の備え為さしむ。屢々以て魏朝に聞し，魏朝は聽かず。**陵**は遂に將佐を殺し，宿預之衆を帥いて來奔し，濱淮の諸戍は備え有るを以て全くすを得る。**陵**は邊に在ること歷年，陰に邊州の豪傑と結ぶ。**陵**の既に叛くや，郡縣は多く**陵**の黨を捕え送り，**淵**は皆な撫でて而して之を赦し，唯だ**陵**に於いて罪を歸し，衆心は乃ち安ず。（連座して南への逃亡するを未然に防ぐ）

■閏月，丙子（３日），東陵公の**寶覽**を立てて始安王と為し，靖王の**后**を奉ぜしむ。（遙光が誅せられ、跡継がいなくなった）**(8-252p)**

■**沈陵**（魏の南徐州より来る、その位任により改めて北徐州という）を以て北徐州（鐘離に治す、齊の南徐州は京口に治す）刺史と為す。

■［帝の刀敕は蕭坦之粛清、海陵の宅］**江祏**等は既に敗れ，**帝**の左右捉刀、應敕之徒は皆な恣横にして事を用い，時の人は之を謂う、

「刀敕」。

蕭坦之は剛很而して專らなり，嬖倖（君主などに特別にかわいがられる、へいこうするの語源）は畏れ而して之を憎む。**遙光**が死して二十餘日，**帝**は延明（殿）の主帥の**黃文濟**を遣わして兵を將いて**坦之**の宅を圍ましめ，之，並びに其の子の秘書郎の**賞**を殺す。**坦之**の從兄の**翼宗**は海陵（晉の安帝は廣陵を分けて海陵郡を立てる。江蘇省淮揚道泰県、現・泰州市姜堰区）太守と為り，未だ發せず（赴任せず），**坦之**は**文濟**に謂って曰く、

「從兄の海陵の宅は故に應に它無かるべし。」（他変なし、無事という意味）

文濟は曰く、

「海陵の宅は何處に在るや？」

坦之は以て告ぐ。**文濟**は**帝**に白し，**帝**は仍りて遣りて之を收えしむ。其の家を檢するに，貧至り，唯だ質錢の貼（借用証書）の數百有り，還りて以て**帝**に啟す，其の死を原し，尚方に系ぐ。

■［劉暄の誅殺］茹法珍等は、

「**劉暄**に異志有り」

と譖り，**帝**は曰く、

「**暄**は是れ我の舅なり，豈に應に此れ有るや？」

直閣新蔡の**徐世標**は曰く、

「**明帝**（高帝の兄の子、武帝の同堂の兄弟）は乃ち**武帝**の同堂にして，恩遇（138 巻武帝永明十一年に見える）は此くの如

し，猶ほ**武帝**之後を滅す（明帝紀にあり）。舅は焉んぞ信ず可けん邪！」
遂に之を殺す。

■<u>［曹虎も誅せられ、大臣は多く誅殺］</u>**曹虎**は誘納に於いて善くし，日に荒客（蠻中や化外から来る者）を食わしめるは常に數百人。晩節（晩年）吝嗇にして，雍州を罷めるときに，錢五千萬有り，它物は之に稱う。**帝**は**虎**が舊將なるを疑い，且つ其の財を利とし，遂に之を殺す。**坦之**、**暄**、**虎**が新たに除せられる所の官は，皆な未だ拜するに及ばず而して死す。

■初め，**高宗**は殂に臨み，降昌（繁栄）の事を以て**帝**を戒めて曰く、
「事を作すには人の後に在る可からす。」
故に**帝**は數々近習と謀りて大臣を誅するや，皆な倉猝に於いて發し，決意は疑い無し。是に於いて大臣人人は能く自ら保つもの莫し。

■九月，丁未（５日），豫州刺史の**裴叔業**を以て南兗州刺史と為し，征虜長史の**張沖**を豫州刺史と為す。

■壬戌（２０日），頻る大臣を誅するを以て，大赦す。

●<u>［吳人の茹皓の同車を阻む］</u>丙戌（４４日?、丙寅の２３日か），**魏主**は長陵に謁し，白衣左右（左右で官の無い者）の吳人の**茹皓**を引いて同車せんと欲す。**皓**は衣を奮いて將に登らんとし，給事黃門侍郎の**元匡**は進みて諫め，**帝**は之を推して下ら使め，**皓**は色を失って而して退く。**匡**は，**新城**（魏の高宗の弟）之子也。

■<u>［益州刺史の劉季連の傲慢に反乱］</u>益州刺史の**劉季連**は**帝**の德を失うを聞き，遂に自ら驕恣し，刑を用いるに嚴酷なり，蜀人は之を怨む。是の月，兵を遣わして中水（資江、沱江。四川省永寧道資陽県、現・資陽市雁江区）を襲わしめ，克たず。是に於いて蜀人の**趙續伯**等は皆な兵を起こして作亂し，**季連**は制する能わず。**(8-254p)**

■<u>［徐孝嗣らの誅殺］</u>枝江の文忠公の**徐孝嗣**は，文士にして顯らかに同異せざるを以て，故に名位は重しと雖も，猶ほ久しく存するを得る。虎賁中郎將の**許准**は**孝嗣**の為に事機を陳說し，廢立を行なわんことを勸める。**孝嗣**は疑いを遲（続は持）すること之を久しくし，謂うに必ず干戈を用いる之理無し。**帝**の出遊するを須ち，城門を閉じ，百僚を召して集議して之を廢せんとす。此れ懷有りと雖も，終に決する能わず。諸々の嬖倖は亦た稍く之を憎む。西豐の忠憲侯の**沈文季**は自ら老疾に托し，朝權に豫からず，侍中の**沈昭略**は**文季**に謂って曰く：
「叔父は行年六十，員外僕射（事に預からざるを揶揄）と為り，自ら免かるるを求めんと欲すとも，豈に得る可き乎！」
文季は笑いて而して應ぜず。冬，十月，乙未（２３日），**帝**は**孝嗣**、**文季**、**昭略**を召して華林省に入らしむ。**文季**は車に登り，顧みて曰く、
「此の行は、恐らくは往きて而して反らざらん。」
帝は外監の**茹法珍**をして賜うに藥酒を以てせしめ，**昭略**は怒り，**孝嗣**を罵りて曰く、
「昏を廢し明を立てるは，古今の令典なり。宰相は才無く，今日有るを致す！」
甌（瓶・鉢）を以て其の面に擲ちて曰く、
「破面鬼と作ら使めるべし！」
孝嗣は藥酒を飲んで斗餘に至り，乃ち卒す。**孝嗣**の子の**演**は**武康公主**（武帝の女）に尚し，**況**は**山陰公主**（明帝の女）に尚し，皆な坐して誅せらる。**昭略**の弟の**昭光**は收の至るを聞き，家人は之に逃げるを勸める。**昭光**は其の母を捨てるに忍びず，入りて，母の手を執りて悲泣し，收者は之を殺す。**昭光**の兄の子の**曇亮**は

逃げ，已に免かるるを得，**昭光**の死を聞き，歎じて曰く、
「家門は屠滅し，何ぞ生を以て為すや！」
吭（喉笛）を絶ちて而して死す。

【陳顯達の挙兵と敗北】

■［陳顯達の江州での挙兵］初め，太尉の**陳顯達**は自ら**高**、**武**の舊將なるを以て，**高宗**之世に當り，內に危懼を懷き，深く自ら貶損し，常に朽弊の車に乘り，道（導）に從う鹵簿は止だ羸小なる者十數人を用いる。嘗て宴に侍し，酒酣にして，**高宗**に啟して枕を借り，**高宗**は之に與え令む。**顯達**は枕を撫でて曰く、
「臣は年は衰え老にして，富貴は已に足り，唯だ枕を枕として死するに欠き，特に**陛下**に就きて之を乞う。」
高宗は色を失って曰く、
「公は醉う矣！」
顯達は年禮（禮には大夫は七十を以て致仕す）を以て退くを告げ，**高宗**は許さず。**王敬則**の反するに及び，時（前巻高宗永泰元年にあり）に**顯達**は兵を將いて魏を拒ぎ，始安王の**遙光**は之を疑い，**高宗**に啟して軍を追いて還らしめんと欲す。**敬則**の平らぐに會いて，乃ち止む。**帝**の即位に及び，**顯達**は彌々建康に在るを樂しまず。江州を得る。甚だ喜ぶ。嘗て疾有り，治せ令めず，既に而して自ら愈ゆ，意は甚だ悅ばす。**帝**の屢々大臣を誅し，傳えて、
「當に兵を遣わして江州を襲わしむべし」
と雲（続は云）うを聞き，十一月，丙辰（１５日），**顯達**は尋陽に於いて擧兵し，長史の**庾弘遠**等をして朝貴に書を與え，**帝**の罪惡を數え令め，云う、
「**建安王**（帝の弟の寶寅は郢州刺史、夏口に治す）を奉じて主と為さんと欲し，京塵の一靜するを須ち，西に（郢州は夏口に治し、尋陽の西にあり）大駕を迎えん。」
■乙丑（２４日），護軍將軍の**崔慧景**を以て平南將軍と為し，衆軍を督して**顯達**を擊たしむ。**(8-255p)** 後軍將軍の**胡松**、驍騎將軍の**李叔獻**をして水軍を帥いて梁山に據らしむ。左衛將軍の**左興盛**をして前鋒軍を督して杜姥宅に屯せしむ。
■十二月，癸未（１２日），前輔國將軍の**楊集始**（前巻明帝建武四年に降を請う）を以て秦州刺史と為す。
■［陳顯達の敗死］**陳顯達**は尋陽を發し，**胡松**を採石（続は采石、安徽省蕪湖道當塗県、現・馬鞍山市当塗県）に於いて破（続は敗）り，建康は震恐す。甲申（１３日），新林に軍し，**左興盛**は諸軍を帥いて之を拒む。**顯達**は多く屯火を岸側に置き，軍を潛めて夜渡り，宮城を襲う。乙酉（１４日），**顯達**は數千人を以て落星岡（石頭城の西）に登り，新亭の諸軍は之を聞き，奔りて還り，宮城は大いに駭き，閉門して守りを設ける。**顯達**は馬槊（続は稍）を執り，步兵數百を從え，西州（齊書顯達傳に洲）の前に於いて台軍と戰い，再び合い，**顯達**は大勝し，手ずから數人を殺し，槊（続は稍）は折れる。台軍は繼いて至り，**顯達**は抗する能わず，退き走り，西州の後ろに至り，騎官（馬隊主副の下）の**趙潭**は**顯達**を注刺（稍で力を尽くして注ぎて刺す）し，馬より墜とし，之を斬り，諸子は皆な伏して誅す。長史の**庾弘遠**，**炳之**（宋の元嘉末に登場）之子也，朱雀航に於いて斬られる。將に刑せられんとし，帽を索めて之を著けて，曰く：、
「**子路**は纓を結び，吾は以て冠せず而して死す可からず。」（孔子の門人、敵に擊たれて冠の纓を経つや、君子は死すとも冠を免がず、と纓を結びて死す）
觀る者に謂って曰く、
「吾は賊に非らず，乃ち是れは義兵なり，諸軍（諸君とすべし）の為に命を請う耳。**陳公**は太だ事を輕んぜ

り。若し吾が言を用いれば，天下は將に塗炭を免ずるべし。」
弘遠の子の**子曜**は，父を抱いて命を代わらんを乞い，並せて之を殺す。

■［帝の悪逆横暴度合いが極まる］**帝**は既に**顯達**を誅し，益々自ら驕恣し，漸く出でて遊走し，又た人の之を見るを欲せず。出る毎に，先ず過ぎる所の人家を驅して斥し，唯だ空宅を置く。尉司（晉の初め洛陽に六都尉を置き、江左も建康に六都尉を置く）は鼓を撃ち圍を踴み，鼓聲の聞く所，便ち應に奔走し，衣履の暇あらず，禁を犯す者は手に應じて格殺（撃殺）す。一月に凡そ二十餘出で，出でて輒ち定むる所を言わず，東西南北，驅らざる處無し。常に三四更の中を以て，鼓聲は四出し，火光は天を照らし，幡戟は路に横たわる。士民は喧走して相い隨い，老小は震驚し，啼號は道を塞ぎ，處處に禁斷し，過ぎる所を知らず。四民は廢業し，樵蘇の路は斷え，吉凶は時を失い（冠婚葬祭も出来ず），乳婦（続は乳母）は寄產し，或いは病を輿し屍を棄て，殯葬するを得ず。巷陌に幔を懸け高鄣を爲り，仗人を置きて防守し，之を「屏除」と謂い，亦た之を「長圍」と謂う。嘗て沈公城に至り，一婦人の產に臨む有り，去らず（綱目には、去る能わずに作る），因りて腹を剖いて其の男女を視る。又た嘗て定林寺（蔣山にあり、鐘山。江蘇省金陵道江寧県の東北、現・南京市江寧区）に至り，沙門の老病にして去る能わざる有り，草間に藏れる。左右に命じて之を射ち，百箭は俱に發す。**帝**は膂力有り，弓を牽いて三斛五斗に至る。又た幢を擔うを好み，（8-256p）白虎の幢は高さ七丈五尺，齒上に於いて之を擔い，齒は折れども倦まず。自ら擔幢の校具（器械）を製（続は制）し，伎衣は金玉を以て飾り，侍衛は側に滿ち，諸々の變態を逞しくし，曾て愧色無し。乘馬を東冶營兵の**俞靈韻**に學び，常に織成の褶褶，金薄（金箔）の帽を著け，七寶の槊（続は稍）を執り，急に縛褲を裝し，雨雪を凌冒し，坑阱（落とし穴）を避けず。馳騁（馳せる）して渴乏すれば，輒ち下馬し，腰邊の蠃（ひさご）器を解き取りて，水を酌みて之を飲み，復た上馬して馳せ去る。又た無賴の小人の善く走る者を選んで逐馬左右五百人と為し，常に以て自らに隨う。或いは市側に於いて親幸の家を過ぎ，環回宛轉し，城邑を周遍（続は徧）す。或いは郊に出て雉を射，射雉場は二百九十六處を置き，奔走して往來して，略ぼ息する暇あらず。

●［魏の官制度］**王肅**は魏の為に官品を制し百司，皆な江南之制の如く，凡そ九品，品は各々（正従）二有り。侍中の**郭祚**は吏部尚書を兼ねる。**祚**は清謹にして，官位を重惜し，銓授有る毎に，其の人を得ると雖も，必ず徘徊すること之を久しくし，然る後に筆を下して，曰く、
「此の人は便ち已（続、己×）に貴し矣。」
人は是を以て多く之を怨む。然れども用いる所の者は職に稱わざる無し。

令和 2 年 3 月 31 日	翻訳開始	8205 文字
令和 2 年 4 月 9 日	翻訳終了	14593 文字
令和 2 年 10 月 5 日	完訳終了	17568 文字
令和 3 年 3 月 24 日	微修正	17215 文字
令和 3 年 11 月 5 日	書下し終了	17768 文字